

消えた娘の名は、村木美奈むらきみなといった。

年齢は二十三歳——私の孫の江美と三歳しか歳が変わらない。が、村木美奈は四歳と二歳の二人の子どもの母親である。

私は、カウンタに置かれたジョニー・ウオーカーの黒ラヴェル——ジョニ黒のロックが入ったグラスを覗き込んだ。

「お願いします、大尉殿！」

カウンタの向こうの稲熊仁いなぐまじんが頭を下げた。松葉杖を突いているので、かなり無理な体勢だ。カウンタの奥から、稲熊自身が描いたシャーロック・ホームズとワトソン博士の肖像画が私をにらむように見下ろしている。すべて鉛筆だけで描かれた二人の肖像画は、まるで写真のように、鋭い目線を私に向けていた。

私はジョニ黒を口に含んだ。木製の樽の香ばしさを、しばし、舌の上で転がす。そして、嚥下した。熱いものが食道を下りてゆく。

真夏にウイスキーのロックも悪くはない。

稲熊は、失踪した村木美奈の大叔父にあたる。稲熊の妹の孫が、村木美奈だ。

その村木美奈は、二人の子どもとともに、この街の北のはずれの〈コーポあずさ〉という賃貸住宅に三人暮らしをしていた。しかし、一週間ほど前から連絡がつかなくなったという。

稲熊の妹夫婦——つまり村木美奈の両親——がその家へ行くと、家具は手つかずのまま、家族三人の姿だけが消えていたという。携帯電話はすでに解約されていた。通帳や印鑑、カードの類は見つからなかった。

「問題は、元の夫つてえ男です」

稲熊は、憤懣やるかたない、といった様子で、カウンタの上に置いたままのショット・グラスにブランデーをなみなみと注いだ。松葉杖が揺らぎ、ずいぶん危なっかしい姿勢だ。

稲熊は、グラスのブランデーを一気に空けた。

村木美奈の元夫は、井之坂重吾いのさかしんじといった。年齢は、美奈よりも二つ年下の二十一歳。職業不詳。しかし、いつも金に困っている様子はなかったという。それ故、結婚当初は、家賃が月二十五万円のマンションに暮らしていた。

しかし二人目の子どもが生まれた頃から、二人の結婚生活に、大きな変化が訪れたらしい。

昨年、二人は別居した。まだ正式に離婚は成立していないので、村木美奈は、法律上、今でも「井之坂美奈」のままである。

「はじめて顔を合わせたときから、私には井之坂つて野郎が氣にくわなかったんですよ」

「名探偵らしからぬ、偏見に満ちた台詞だな」

稲熊は、シャーロック・ホームズの熱狂的なファンだ。私がいるのは、稲熊の営業する店〈ブルー・カーバンクル〉だった。シャーロック・ホームズにゆかりのある名前らしい。

昼にも、夜にも酒を出す店だ。壁には一面に稲熊の描いたシャーロック・ホームズ物語に登場する人物の肖像画がずらりと飾られている。店の奥にアップライト・ピアノがあり、小さなステージになっており、コンサートをこなうこともできた。

「私は名探偵という柄じゃありませんよ、なのに、分不相応に探った結果が、これです」

稲熊は、松葉杖を持ち上げた。

稲熊は、妹から話を聴いてすぐ、タクシーを拾い、井之坂の住むマンションへ向かった。思いの外、高級なマンションだったという。

玄関に現れた井之坂は、たいへんに如才ない男だった。

「もちろん、部屋に上げろと言いました。生つ白い男でした。まるで、髭なんか生えたことがないかのような、幼い顔の男——いや、ガキでしたよ。いつの間に、日本の若造は、こんなに幼くなつてしまつたんですかね」

「繰り言は何も生まんよ。それで、部屋に美奈さんはいなかつたんだな？」

稲熊は、井之坂に、何をやっているのかと詰問した。

井之坂は、インターネットを使った通販ビジネスだ答えた。稲熊は、半ば強引に上がり込み、室内を見て回った。3LDKと思われる部屋のうち、八畳ほどの洋間が「オフィス」として使われていた。井之坂と同じくらいか、あるいはもつと若い男が三人、パソコンに向かっていた。三人とも稲熊とは一切口を利かず、ただパソコンのモニタ

に向かっていたのが稲熊の印象に残っていたという。

「美奈の姿はありませんでした。もちろん、子どもたちも」

井之坂晋吾は、飄々とした受け答えで、美奈は自宅で子どもたちと暮らしているはずだ、月に二十万円の仕送りもしている、と稲熊に告げた。

稲熊は、井之坂の言葉には、どこか嘘くささを感じながらも、退散せざるを得なかった。

納得のできないまま、待たせておいたタクシーに乗り込もうとした稲熊を待っていたのは、三人組の若い男たちだった。二人はおそらく二十代、もう一人は三十代半ばだった。

年長の一人は、やや離れたところから見ている。この暑いさなかに、濃い紫色のジャケットを着て、薄い色の付いたサングラスをかけていた。あとの二人が、素早く稲熊に駆け寄り、一人が背後から羽交い締めにし、もう一人が稲熊の鳩尾を殴った。

「トウシロのジジイが首突っ込むんじゃねえ」

年長のジャケットの男が冷めた声で言い、稲熊を蹴った。咄嗟に体を丸めた稲熊の左太ももに、男の踵が命中した。そして、男たちは近くに路上駐車していた黒っぽい車で去った。稲熊はそのままタクシーで近くの病院へ向かった——という顛末のようだった。

「よく折れずに、ヒビだけで済んだな」

稲熊がブランドーの瓶に手を伸ばした。私が注いでやると、稲熊は直立不動の姿勢になった。昔と変わらない。

「カルシウムとコンドロイチンのサプリメントを毎日飲んでますからね。大尉殿にも、ぜひお勧めしますよ」

「サブ……なんとかというのは、薬かね」

「栄養剤みたいなものです」

「それを飲んで骨を鍛え、おまえさんの代わりに脚をへし折られて来いと?」

「勘弁して下さい。私を襲った連中は、カタギじゃありませんでした」

「それは、名探偵殿の推理なのか、それともただの直感かね?」

「私はホームズじゃありませんよ。直感といえば、そりゃあ直感です。大尉殿も、カタギとヤクザは直感で見分けがつくでしょう?」

私はアイス・ペールから氷をグラスに放り込むと、ジョニ黒をたつぷりと注いだ。

「どこの組の連中なのか、それに井之坂とどうつながっているのか……」

「そんなことはどうだって構やしないんです。要は、美奈を見つけたいんです。いいですか、私だって、あの子のおむつを替えたことがあるんですから」

すでに稲熊のグラスは空だった。いつにも増してペースが速い。私は稲熊のショット・グラスにブランデーを注いだ。

「で、おまえさんの推理はどうなんだね? 美奈さんは、井之坂もしくは彼に命じられた者によって拉致されたのか。それとも、自ら行方をくらましたのか?」

「あの井之坂という男に、連れ去られたんですよ。あいつならやりかねない」

私はグラスを手にして、振った。からから、と響いた。この店では、いいグラスを使っている。

「しかし、幼い子どもが二人もいる。人知れず三人も拐かすのは難しいと思うが……」
「確かにそりゃ、私だって考えました。けれど、生かしておかなければ……ほら、弁

護士一家のひどい事件があったじゃありませんか」

稲熊はグラスのブランデーをあおった。

確かに、私もその事件を思い出した。狂信的な宗教団体が、自分たちを告発すべく調査している弁護士夫婦とその幼い子どもを拉致し、全員を殺害し、山林に埋めたという陰惨な事件だった。

「証拠は?」

「残念ながら。ですから大尉殿、どうかお願いします。ぜひとも美奈を見つけていた
だきたいのです」

そう言い、稲熊は私に海軍式の最敬礼をした。

「飛曹長、この瓶は、もうじき空になる。新しいのを一本用意しておくように」

「はっ、かしこまりました、大尉殿!」

再び稲熊は最敬礼をした。そして、相手を崩した。

「ギネスも三本ほど付けますよ」

「ヘビューガルテン」のほうがいい。しかし、忘れてくれるな、私のほうがおまえさんよりも二つ、いや三つ年上だ。それだけ老いぼれている」

「いえ、大尉殿は、わたしとはこの出来が違う」

稲熊は右のこめかみをとんとんと指先で叩いた。

「ただの偶然の積み重ねだよ。我々は、とうに死んでいるはずだった」

「そうですね。運が良かったのか悪かったのか……生き長らえました。先に靖國に行った連中に申し訳が立ちません」

私は残りわずかになったジョニ黒を喉に流し込み、〈ブルー・カーバンクル〉の窓から外をみやった。

「今年も暑くなりそうだ」

「夏は嫌いです。いやでも思い出しますから」

「私もだよ」

私は、勘定を払い、ストールから立ち上がった。

翌朝、八時に家を出ようとする、嫁の有里子ゆりこが怪訝そうな表情になった。

孫の江美は、大学が夏休みなので、まだベッドのなかだろう。

「気をつけて下さいね」

有里子は言った。

息子、宏樹の妻である有里子は、妙に勘が鋭い。宏樹のシンガポール勤務が思いがけず長引いているので、私はまるで二人の妻の尻に敷かれたような心持ちで暮らしている。が、それは決して苦痛ではなかった。

汗を拭き拭き、バス通りまで歩いた。そこでタクシーを拾い、まずは村木美奈が住んでいたという〈コーポあずき〉へ向かった。二階建てで、全部で八室。村木美奈の部屋は、二階の右端の角部屋だった。合い鍵は、稲熊から預かっていた。

タクシーを降りると、熱気とともに蝉のかしませしい鳴き声が押し寄せてきた。時計を見る。四時を少し過ぎていた。一気に汗が噴き出した。

タクシーの運転手に、「ちょっと待って下さい」と声をかけ、コーポに向かった。鍵を開けて、室内に入った。

外気とは違う種類の、淀んだ暑さの空気が、そこには滞留していた。

特に何かを探していたわけではない。すでに村木美奈の両親も、稲熊もこの部屋を調べている。私は、赤の他人に過ぎない。

間取りはI Kと呼ぶのだろうか。入つてすぐ右手がキッチン。反対側に扉。開くと、トイレと風呂が一体のユニット・バスだった。鏡の前にプラスチックのカップと、二本の歯ブラシ。その下にはシャンプーの類と思われる容器が三本並んでいる。

ユニット・バスを出て部屋に踏み込んだ。

さして広くない部屋だが、必要最低限度の家具しかないので、妙にがらんとして見えた。やや古びた箆笥を開けた。衣類、下着、いずれも女性物だ。四つの引き出しのうち、二つは空だった。

引き出しを閉めた。すぐ隣の衣装掛けには、クリーニングに出したばかりのビニール袋に包まれた冬物のコートが三着だけ、所在なげにぶら下がっている。

もう一度キッチンに戻った。冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の電源は入ったままだった。封を切ったオレンジジュースの紙パック。賞味期限を見ると、二週間前だった。そして、発泡酒の五百ミリリットル缶が二本。野菜室では、取り残された葱が健気に芽を伸ばしている。

バチは当たらぬだろうと思い、発泡酒を一本頂戴した。プルタブを開けて、飲んだ。美味くはないが、不味くて飲めない、というほどでもない。

冷凍庫には、何種類かの冷凍食品が封も切らずに整然と入っていた。コロッケ、ギョーザ、ハンバーグ……見ているだけで胸焼けを起こしそうだった。

流しは、掃除がゆき届いている。生ゴミもないし、カビも生えていない。続いて、ベランダに出てみた。西日がかなりきつく当たることがわかった。当然のことながら、洗濯物は一切掛かっていなかった。比較的新しい三輪車が、片隅に置かれていた。

発泡酒を飲み干すと、ガラス戸を施錠し、部屋に戻った。キッチンで空き缶を洗い、とりあえずそのまま流しのなかに置いた。

〈コーポあずさ〉を出て鍵を掛けると、タクシーに戻った。三十分近くも待たせてしまったが、運転手はさして不機嫌そうでもなかった。次に、私は井之坂晋吾の自宅

兼オフィスというマンションを目指した。タクシーの運転手は、もう五十代後半に見えるが、道には不案内だった。最近、前の会社をリストラされ、この街のタクシー運転手に転職したばかりだという。

「儲かりませんねえ。規制緩和とやらで、台数と運転手ばかり増やしたつて、乗ってくれるお客さんが少ないんですから。二度も会社に裏切られた気分ですよ」

運転手は、自嘲気味に笑った。

私もまた、六十年以上も前に、祖国に裏切られた——その後、私はその国を裏切り続けて生きて来た。

結局、人は愚かしいことを繰り返すのだろう。

二十分ほどで、タクシーは井之坂晋吾の自宅兼オフィスの前へ到着した。

「また、待ちますか？」

運転手は言った。

尾けられていることはわかっていた。左のサイド・ミラーには、十五分ほど前からずっとこのタクシーに張り付いている黒いレクサスが映っていた。

すでにタクシーのドアは開いていた。

「いや、行き先を変更したいんだが——」

遅かった。すでにレクサスから人影が降りていた。

開け放たれたタクシーのドアから、黒い腕が伸びてきた。左の二の腕を掴まれた。否応なく、引きずり出された。

「何するんだ！」

運転手の声が耳に届いた。

私は相手の力に逆らわず、タクシーのシートから車外へ転がり出た。

同時に、相手の反対の手首を掴んだ。転がりながら、ひねり上げる。起き上がった。

「痛えええっ！」

無様な悲鳴。まだ子どものように若い男だった。黒いTシャツに黒いジャージ姿。

鈍い手応え——おそらく左の尺骨が折れたはずだ。

もう一人が走り寄ってくる。正拳——多少は格闘技の経験があるらしい。が、私のような老いぼれでも見切ることができた。その腕を取った。力も込めずに体を回転させる。

男の腕は、私の体に巻き込まれるようにして、普通ではない向きにねじ曲がった。裏返った声を一瞬だけ上げて、二人目の男はひざまずいた。アスファルトの上で泣き喚いている若造よりは、やや年上か。この灼熱の真夏の昼間にダーク・スーツを着て、ストライプのネクタイ姿——それなりの姿をしなければならぬ地位の男なのだろう。

私は、二番目の男を見やった。最初の男とそっくりな、黒いTシャツにジャージ姿。これが連中の若造の制服なのか、と一瞬だけ思った。

「クソジジイがあっ！」

駆け寄ってくる男の右の腕を取った。そのまま勢いに任せてやや体を捻る。男はくると回転し、熱せられたフライパンのごときアスファルトの上に転がった。短く悲鳴を上げたが、それはアスファルトの熱さのためか、後頭部をしたたかに打ったためなのか、わからない。

どちらでもいいことだ。

私は年嵩のスーツの男に近づいた。腕を抱えながらも、堅気ではない視線を私に向けた。確かに、この男は三人組のリーダー格なのだろう。

「ジジイ！ ぶつ殺すぞ、この野郎！」

腹筋は鍛えられているらしい。ドスのよく効いた声だった。

「残念ながら、殺せなかつたな」

男はまだ淀んだ眼で私を見上げていた。

「ただで済むと思うなよ！ このクソジジイ！」

スーツの男が怒鳴った。

「では、どこに何を支払えばいいんだね？ 〈石原組〉か？」

カマをかけたが、凶星だった。いや、凶星以上だった。男の顔が一瞬だけ蒼白になった——一瞬だけだが。

「てめえも、もう一人のジジイも、絶対ぶつ殺す！ 覚悟しとけや！」

「おまえたちは、語彙が貧困だ。もつと言葉を学ばなければ。おっと、年寄りはいついつい説教臭くなつて、いかんな」

三人の男たちは、よろめきながら、タクシーのすぐ後ろに停車した黒塗りのレクサスに乗り込んだ。が、なかなか動き出さなかつた。三人とも怪我をしているから、誰も運転できないのかもしれない——私の知つたことではないが。

タクシーに乗り込むと、運転手は凍り付いたままだつた。

「申し訳ない、お見苦しい場を見せてしまった。次には……」

相変わらず、タクシーの運転手は凍り付いたまま、ウインドウの向こうのあらゆる方向を見つめていた。

背後のレクサスが、ようやく動き出した。バックして私の乗つたタクシーから離れ、まるで初心者のような、ぎこちないUターンして、姿を消した。

メーターに眼をやつた。五千円を少し超えたくらいの金額を表示していた。

私は一万円札を、運転手に差し出した。

「迷惑をかけてしまった。釣りは要らない」

が、運転手は自分の膝の辺りを見つめながら、絞り出すような声で言つた。

「要りませんよ。汚い金を受け取るほど、まだまだ落ちぶれてませんか」

振り返つた運転手の視線は、思いの外、強く光っていた。

運転手は、私の顔を見ないように、一万円札を無造作に受け取ると、釣りを突き返した。

私は、連中のようなヤクザ者とは違う——と言いかけたが、無言でタクシーを降りた。これ幸いとばかりに、すぐさまドアが閉まつた。

レクサスに続いて、タクシーもまた、私から逃げるように走り去つた。

空を見上げた。まだ、陽は高い。無論、気温もまた。

じつとじているだけで汗がにじむ。鼓膜を振動させるクマゼミの叫び。

まだ青い空に、銀色の飛行機。あつという間に蒼穹を横切る。少し遅れて、爆音が耳に届いた。自衛隊機だろう。

六十余年前、あのような戦闘機は、日本に存在しなかつた。無論、存在したならば、戦闘機で体当たりをするなどという、愚劣で邪道な攻撃を考えなかつただろう。

しかし、私は両手で数え切れない数の若者——いや、なかには「少年」もいた——を「お国のため」と称して死に追いやった。

そして、自らは生き延びてしまった。

空はまぶしかった。蟬がかしましい。

気づくのが遅れた。

背後に人の気配——おそらく身長は百八十センチ程度、細身で革靴を履いている。そこまではわかった。振り向く前に、肩に手を置かれた。

体が動かない。完全に、固まっていた。ただそれだけの行為で、私の動きは封じられていた。

私の右肩に置いた手は、力を入れずに私の上体を反転させた。私は完全になすすべを持たず、相手のされるがままだった。

眼の前に立っていたのは、五十近い、白髪混じりの男だった。この暑さのなか、ダーク・スーツを着こなし、地味な灰色のピンストライプのネクタイを締めている。

殺気は感じられない。むしろ逆に、たいへんに穏やかで静謐な緊張感が、男からはじみ出していた。先程のようなチンピラとは違う。

「一緒に、いらしていただきたいのですが？」

決して大声ではないが、鋭く空気を貫く声。

言葉こそ問いかけているが、形だけの修辭疑問文。

私は、じつと、男を見やった。中年の男は、私から眼をそらさなかった。私はうなずいた。

二十メートルほど前方に、黒いヴァンが停まっていた。後部座席にはスモークが貼られており、内部を窺うことはできなかった。

後部の電動スライド・ドアがゆつくりと開いた。

暗がりのなか、一人の若い女性が座っているのが見えた。

「どうぞ」

男は静かな口調で言った。

私は、若い女性の隣に腰掛けた。

「ミクのお爺ちゃん？」

不意に、隣の座席の若い女性が訊ねた。28という数字の入った白いTシャツに、膝下丈のジーンズという姿。やや茶色がかった肩までの髪。二十代から三十代までの何歳にでも見える。大半の男が「美人」と評すだろう。言葉に、関西の訛りがあつた。

「ミク？」

「あ、せや。本名のわけないわな」

「私は美奈さんの祖父じゃない。かいつまんで言えば……美奈さんの親戚の友人だ。ついでに言っておくが、私は美奈さんに会ったこともない」

若い女は呆れ顔になった。

「ホンマ、物好きな爺ちゃんやわ。悪いけど、目隠ししてもらおうで」

どこから取り出したのか、女はアイマスクを手にしていった。私は黙って受け取り、顔に着けた。

ヴァンが動き始めた。カーステレオから、小さな音量で、チェロの曲が流れ出した。

「しばし、ご辛抱願います」

運転するダーク・スーツの男は丁寧に言った。

ヴァンは四十分あまりも走つたろうか。建物の地下駐車場へ進入した様子だった。そしてほどなくして、停車した。

「取つてもいいかね？」

私は言いながら、すでにアイマスクを外していた。

女は遠慮もなく大あくびをして、伸びをした。

私たちは男の先導でエレベーター・ホールへ向かった。すかさず女が「12」のボタンを押した。最上階だった。

男は「12—B」という部屋のインタフォンを押した。三十秒ほど何の返答もなかったが、唐突にドアが開いた。開けたのは、若い女だった。関西弁の女より、さらに若いだろうか。

「美奈さんだね」

私は言い、女の顔がこわばった。

「稲熊の爺さんを知っているね？ 彼に頼まれて、あなたを探しに来た」

ヴァンに乗っていた女が口を挟んだ。

「あんた、ホンマにこの子のダンナと関係あれへんのやろな？」

「ない、と確信したからここまで連れてきてくれたのだろう？」

「ご説明しましょう。いいね、ミクちゃん」

男が言う、ミクと呼ばれた女——村木美奈はうなずいた。

「ママあ、アイス溶けちゃうよお……！」

部屋の奥から幼い子どもの声が聞こえた。

「つまり……コールガールとか、出張売春と同じようなものだね」

「うちらはデリヘル言うてるけど」

女が平然と言った。

私の知っている時代の娼婦たちとは、まったく様子が違う——背伸びをするように、進駐軍のGIの腕にしがみついていたパンパンたち。「赤線地帯」に売られてきた若い娘たち……。しかし、斜め前の関西弁の女は、服装も立ち居振る舞いも、孫の江美とさして変わらないように見える。

「では、あなたが社長かね？」

私は黒服の男に訊いた。

「いえ、私は一介のドライバーです。女の子たちの送迎が仕事です。念のため申し上げますがおきますが、このマンションの存在を、店長はまったく知りません」

「解せないことばかりだ」

不意に、関西弁の女がテーブルの上のクッキーを指さした。

「食べへんのやつたら、もろてもええ、お爺ちゃん？」

そう言いながら、すでに腕を伸ばしている。

「ああ、ホンマ、〈カントリー・マアム〉最高やわ。お爺ちゃんのわかれへんこと、めっちゃあると思うで。けど、これが〈アヴァロン〉のやり方やねん」

「〈アヴァロン〉、というのが店の名前かね？」

「あ、言うてもた。ま、ええわな、齋木さん。うわ、また言うてもたがな」

黒服の男は笑い出した。

「構わないよ。この子はリサさん。ここは、店長も知らない、女の子たちの隠れ家のようなものです。ごく稀に、このような駆け込み寺のように、使うことがあるんです」

私も名を名乗り、テールブルの向かいでうつぶむいている村木美奈に視線を向けた。

「つまり、やはり井之坂晋吾から逃れるため、自分で家を出たんですね」

「え、ええ」

村木美奈の家には、大人の女性の衣類や下着は残っていた。が、子供服、紙オムツなどがまったくなかつた。冷蔵庫内も整理され、流しにあるべき生ゴミも捨てられていた。その時点で、村木美奈が何者かに拉致されたのではなく、自らの意志で姿を消したのだ、ということがわかった。

口を挟んだのは、関西弁の女——リサだった。

「ミクちゃんの元旦那、ホンマ、胸くそ悪なるほど、最低の奴やねん。DV男で、しかもストーカー」

「悪いが、日本語で言ってくれないかな」

うつぶむいたまま、村木美奈が小声で答えた。

「ショウタ——下の子ができたのは、予想外だったんです。その後……あの人、家で暴力振るうようになったんです。何か、仕事がうまくいかないときなんか……でも、普段はいい人なんです。優しくしてくれるんです。だけど……」

「ええ人なことあらへんやんか。だつて、追いかけて来たんやろ？」

「つまり、美奈さんが住んでいたコーポに、井之坂が現れたんだね」

村木美奈は、こくり、とうなずいた。

「どうやって見つけたのか……あいつから逃げたつもりだったのに、ついついドアを開けちゃったんです。ドアの向こうで、あいつ、泣きそうな声で謝るから……そして、子どもたちもいる前で、いきなり……」

「それ以上言わんでええよ」

リサが口を挟んだ。

「しかし、男から逃げるために、わざわざ苦界に身を沈めることもなからう……」

私はつぶやいた。黒服の齋木と呼ばれた男は、微笑を浮かべながら、静かに言った。

「そんなことを言ったら、彼女たちに叱られますよ」

「え？ 何なん、『クガイ』って？」

リサがクツキーを口に頬張ったまま、顔を斎木に向けた。

「時代は変わったな……」

私は嘆息した。

「なかにはアルバイト感覚の子もいます。大抵、そういう子はすぐに辞めてしまいますが」

斎木が苦笑混じりに言った。私は村木美奈に向き直った。

「井之坂……君は、何の仕事をやっているんだね？」

「さあ……インターネット関連の企業だつて、言ってみましたけど……」

「ご主人の仕事内容を知らないのかね？ インターネットを使った通信販売だとのことだが」

いささか呆れながら、私は言った。

「あいつに、会ったんですか？」

「いや、会えず仕舞いだった」

私は、井之坂のマンション前での顛末——ヤクザに襲われてから、斎木とリサに会うまでのことを話した。

「稲熊の爺さんは、井之坂に会っている。が、同じようにヤクザ者に襲われ、腕を折られた」

ほんとうは、骨にヒビが入っただけだが、多少、大袈裟に告げたほうがこの娘には真意を伝えやすいだろう。

「井之坂の仕事は、法に触れるようなことなのかね？」

「よく……わかりません」

村木美奈はうつむいた。

私は、斎木のほうへ顔を向けた。

「あんたたちは、どうしてあのおときあの場所へいたんだね？ 偶然とは思えない」

斎木は一瞬ためらったが、「ふう」と息を吐いた。

「実は、妙な話なんです」

「うちが話すわ」

リサがあとを引き取った。

〈アヴァロン〉には、早番と遅番がある。午後一時から夜九時までの早番勤務と、午後八時から翌朝五時までの遅番勤務。早番のリサが〈アヴァロン〉事務所の入っているビルから出てほどなくして、男が声を掛けてきた。職業柄、知らない顔ではなかった。

港西署生活安全課の稲尾という刑事と、その背後にもう一人、見知らぬ男がいた。高価そうなスーツを律儀に着こなし、一見するとホスト風にも見える、三十代半ばの男だった。刑事には見えないタイプの男だった。

稲尾刑事はにやにや笑いながら、歩み寄って来た。

「どうだ、儲かりまっか？」

「ぼちぼちでんな……言いたいところやけど、あかんわ。あんたらが厳しいからな。で、何やねん？ 今日は何をたかりに来たん？」

「それはひどい言いぐさじゃねえか」

馴れ馴れしく話しかけてくるのは、月に一回程度、店長がこの刑事を無料で「接待」している——つまり、お気に入りの女の子をあてがっている——からだ。どこにでもいる汚れた警官だ。

「最近、新しく入ってきたのはいないか？ こんな子だ」

もう一人の男が、一枚の写真を見せた。それは、村木美奈の写真だった。もちろん、リサは知らない、と答えた。

「本当だろうな。こつちはいつだっておまえらを潰せるんだ」

稲尾がにらみつける。

「ああ、こわ！ ほんまに知らんもんは知らんわ。で、その子が何やらかしたん？」

「この娘は関係ない。その旦那に用がある。いや、俺も詳しいことを知らんのだがな」

「じゃ、こつちのイケメン君が知ってんのや」

若いほうの男は戸惑った様子で、上着の内ポケットから身分証を取り出した。

「厚生労働省？ なんで？ うち、ヘンな病気なんか持ってへんで！」

「マトリだな」

つぶやいた。

マトリとは、厚生労働省職員である「麻薬取締官」のことだ。

齋木はうなずき、続けた。

「そのようです。彼らが動いているなら、井之坂のバックには危険な連中が付いていることになりませう」

「稲熊や私を襲った連中か——」

連中は、〈石原組〉という単語に過剰に反応した。しかし、私と因縁浅からぬ〈石原組〉は、先々代の時代から、クスリは御法度だったはずだ。先々代——つまり、今の〈石原組〉三代目組長の祖父、初代〈石原組〉組長と兄弟盃を交わした男が、ヒロポン中毒で戦後すぐに死んでしまったからだ。

その男は、私と同じ時期に海軍航空隊に入隊した「同期の桜」でもあった。今となつては、どうでもいいことだが。

二十一世紀になった今、彼らは経済ヤクザとしてシノいでいるらしい。ただ、傘下の組が勝手にクスリに手を出している可能性はある。

私の知らないことが、あまりに多すぎた——いや、知らなくてもいいことばかりだ。

「美奈さん、あなたは、井之坂の許に戻るつもりはないのだね」

「ありません。もう絶対に、あんな思いはしたくありませんから。それに……わたしが〈アヴァロン〉で働いてるなんて知ったら、絶対にわたし、殺されます」

「いいかい、きつい仕事だ。しかも美奈さんには、お子さんもいる。それでも、この仕事を続けていく覚悟はあるんだね？」

「はい」

村木美奈は、まっすぐに私を見返した。彼女の両の瞳は潤んでいた。

「齋木君、といったね。彼女と二人だけにしてもらえないか」

齋木はうなずくと、リサと一緒にダイニングから出て行つた。

「さて、正直に言うと、美奈さんを完全に信じているわけではない。こういう仕事が、易しいものじゃないことはわかっているね。長続きするものでもない。繰り返すが、美奈さんには二人も子どもがいる。自分だけじゃなく、三人分の命に責任を持つ、と

いうことだ」

「は……はい」

村木美奈は、歯を食いしばるように言った。視線は、私から外そうとしない。

「いつまでもこの仕事は続けられないだろう。それに、いつどこで井之坂と出くわすかもしれない」

「ある程度は、貯金があるんです。お金が貯まったら、この街を出て、どこか遠くで暮らします」

「その前に、ちゃんと離婚すべきだ」

私が言うと、村木美奈ははつとするような面持ちになった。

「井之坂は危険な商売に手を染めている。ヤクザとも関係している。遅かれ早かれ逮捕されるだろう。その際に、あなたに累が及ぶといけない。知り合いに、信用できる弁護士がいる。紹介してもいい」

「でも……あいつに、会うんですか？ 怖いんです、ほんとに怖いんです」

村木美奈は両手で自分の腕を抱いた。

「安心しなさい。あの男に手出しはさせない」

「あいつ……いなくなってくればいいのに……」

村木美奈の双眸に、一瞬だけ昏い光が宿ったように見えた。

「馬鹿なことを行っちゃいけない。美奈さんには、思っている以上に味方がいるんだ。彼らを信じなさい。さて、齋木君たちに戻って来てもらおうか」

村木美奈は安心した表情に戻ると、ダイニングから出て行った。しばらくして、齋木とリサが現れた。

「この場所は、井之坂には知られていないだろうね」

「もちろんです。うちの店の者でも知っている人間はわずかです」

「うちらが、何があってもミク守ったんで、心配せんでええよ」

リサが力強く、クッキーの包装紙を破って開けた。

「油断は禁物だ。井之坂は、前に美奈さんが住んでいたコーポを突き止めている。この老いぼれの出番はないことを願うよ。齋木君、すまないが送っていただけかないかな」

「ご足労をおかけして、申し訳ありません」

「なあ、お爺ちゃん、連絡先、教えて。携帯持つてはるやろ？」

リサがクッキーで口をもぐもぐさせながら言った。私は有里子に持たされた携帯電話を取り出した。

「赤外線、できるん？」

「赤外線？」

携帯電話と赤外線がどう関係するのか、さっぱり意味がわからなかった。

「しやあないなあ」

リサは、私の手から、ひよい、と携帯電話を取り上げると、何か素早く両手で操作し、またすぐに私に返して寄越した。

「あたしと、斎木さんと、ミクの番号とメアド、登録しといたで。その代わりに、お爺ちゃんの番号とメアド、登録させてもらたけど、ええやろ？」

「ああ、ありがとう」

リサは笑顔で袋に手をつ込み、さらにもう一個、クッキーを手を取った。

村木美奈も、深々と私に頭を下げた。

斎木と二人で、エレベーターで地下駐車場へ下りた。斎木に促され、ヴァンの助手席に座った。

「目隠しは？」

斎木は相好を崩した。

「結構です。あなたを信じていますから。それに、助手席にアイマスクをしたご老人が座っていたら、おかしいでしょう」

私は自宅の住所を告げた。

すでに午後四時を過ぎていたが、日差しは強く、遠くに陽炎が見えた。

私は訊ねた。

「美奈さんは、もう客をとっているのかね？」

一瞬、端正な斎木の片方の眉が上がった。

「まだ、彼女たちに……あるいは私のような人間に偏見がおありのようですね。答えは、ノーです。まだ『研修中』なので」

〈アヴァロン〉の「隠れ家」は、思いの外、街の中心近くにあった。目隠しした私

場所を悟られないよう、遠回りをしたのだろう。

わざわざ自宅から二ブロック離れたところに、ヴァンは停まった。

「尾行車はなかったようだな」

「お手間を取らせてすみません」

「こちらこそ、美奈さんを頼みます」

私は頭を下げた。ドアを閉めた。

しかし、私も斎木も、考えが浅かった。

稲熊は怒声を上げた。

「大尉殿が認めようと、自分は断じて認めるわけにいきません！」

テーブル席で笑いさんぎめく声が、一瞬途絶えた。

〈ブルー・カーバンクル〉のマスターが怒鳴ったのだから、客の側にしてみれば当然の反応だった。

「声が大きいぞ。客に逃げられる」

私はベルギー・ビールのグラスを空けた。

〈アヴァロン〉の隠れ家に行つてから、二日経っていた。すぐに〈ブルー・カーバンクル〉に足を運ばず、ただ「美奈さんは無事だから心配するな」と電話で連絡したきりだった。詳細を話せば、稲熊は激怒するに相違ない、と考えたのだ。そして、予想した通りになった。

「彼女自身が選んだ道だ。それに、いい友人たちに護られている。老いぼれたちの出番はなさそうだ」

私のグラスが空くと、稲熊はすぐさま二本目のビールの小瓶を出した。瓶のラベルの絵がうつくしい。

小瓶の栓を抜きながら、稲熊は口を尖らせたままだった。

「いくら大尉殿のお言葉でも、承服できかねます。だつて考えてもみてください。もしも……江美さんが体を売るようになったとしても、それをお認めになるんですか？」

私は、口を持っていきかけたグラスを置いた。

無論、その点について考えを巡らせたことはあった。

「構わんよ。私は、認める」

「大尉殿！」

稲熊の顔が口を開いたそのとき、ドアに取り付けられたカウベルが鳴った。新たな客らしい。稲熊は入り口を見て、やや驚いた表情になった。

「いらつしやいませ」

口調まで柔らかくなっている。ふと見回すと、店内のほぼすべての男性客の視線が客に集まっている。

不躰な連中だ、と思いながら、グラスを干した。苦味のなかに、甘味がある。ビールなのに果実酒のようなふつくらとした柔らかい後味。

「めっちゃカワイイやん、その瓶」

女の声に振り向き、驚いた。男の視線を集めるはずだった。

先日会ったときより、リサの口紅はずっと紅く、マスカラもしっかり付けている。体のラインに密着した服とも呼べぬ服に、膝よりずつと丈が短いスカート。ヒールの高いサンダルを履いている。

「『眼のやり場に困る』とはこのことだ。よくここがわかったね」

「ミクに教えてもらった。で、体調悪い言うて、早上がりして来てみたんやわ。マスタ、お爺ちゃんとおんなじカワイイの、くれる？」

「あ、はいはい」

すっかり稲熊の表情が変わっている。いや、やに下がっている。

「さ、どうぞ。ベルギーのヘビュールガルテンっていうメーカーのビールです。名前前は『禁断の果実』」

そう言いながら、わざわざリサのグラスに注ぎ入れている。

「『禁断の果実』て、なんか危険な感じせえへん？ ラベルの絵もめっちゃ綺麗やわ」

「それは、アダムとイヴ」

得意げに稲熊が蘊蓄を披露する。

「あ、ホンマや」

「ずいぶんと楽しそうだな、稲熊飛曹長」

私は稲熊の豹変ぶりに呆れながらつぶやいた。

リサは、私の小瓶を取り、私のグラスに「禁断の果実」を注いだ。

「お爺ちゃん、乾杯しよ」

私はグラスを掲げた。

「お爺ちゃんの長生きに乾杯！」

リサは言った。

いつの間にか、稲熊がギネスのタンブラーを手に割り込んできた。

「若者が長生きできることを願って！」

結局、三人で乾杯した。

「うわ、ヤバイ！ こんなビールはじめてやわ！」

リサが眼を見開いた。

「その瓶の『アダムとイヴ』、あのルーベンスの描いた絵なんですよ」

「ルーベンス？ 誰それ？」

「お嬢さんなら知っていると思いますけどねえ。あこがれのルーベンスの絵の前で、ネロ少年が言うんです。『パトラッシュ、疲れたろう。なんだかとても眠いんだ……』」

「うわ、『フランダーズの犬』やん。マジヤバツ！ 泣けてくるやんか！」

「よほど危険な果実のようだ。稲熊の性格まで変えてしまった」

私は口を挟んだ。二人の会話の中身は、さっぱり理解できなかつたが。

「何をおっしゃいますか。私にとって、酒とご婦人が人生の悦びです。いやあ、眼福

眼福。寿命が三年は延びました」

遠慮会釈もなく、稲熊はリサの姿を眺めている。

「で、美奈さんは元気かね？」

「ミクはええねんけど、下の子が熱出してしても、昨日はバタバタしとつた。でも、今日はもう大丈夫らしいわ。あたしは行かれへんかつたけど、他の女の子が行つてくれたし、斎木さんも時間見つけてフォローしてくれてるし、ミクも用意ええわ。ちゃんと健康保険証持つとつたから、ホンマ、心配ないで」

稲熊が口を挟んだ。すでにギネスのタンブラーは三分の二空いていた。

「ミクというのは、つまり……」

「そう、美奈さんの源氏名だ。リサさん、この稲熊という男は、美奈さんの今の仕事

を気に入っていないようだ。あなたのほうから何か言ってもらうと、稲熊の石頭も少しは柔らかくなると思うのだが」

「勘弁してください、大尉殿。私たちだって、若い頃は赤線、青線のご婦人たちとよく遊んだものじゃないですか。大尉殿なんて、ずいぶんとご婦人方を泣かせてきたんですよ」

私はため息をついた。リサの容貌だけでなく、そのサバサバとした性格に、すっかり稲熊は籠絡されてしまったらしい。

そのとき、カウベルが鳴った。新たな客だ。今日はずいぶん繁盛している。

「いらつしゃいませ」

スーツ姿の男だった。迷うことなく、リサの隣のストウールに腰掛け、短く「コーラはりますか」と稲熊に言った。

リサが体をこわばらせた。

「あなた……なんで？」

「あなたを尾行させてもらいましたよ。失礼、申し遅れました。白井敏弥と申します」

男はスーツの内ポケットから名刺を二枚取り出し、私と稲熊に差し出した。

歳の頃は三十半ばか後半といった辺りか。よく日に焼けている。まだ外は蒸し暑いだろうが、その顔には汗一滴たりとも浮かんでいない。文字通り、涼しげな面持ちで、男は頭を下げた。

「あなたがマトリか。それで、井之坂は捕まえたのかね？」

「いえ、まだ内偵中です。今日は、あなたにお話を伺おうと思ひまして」

「ほう？ では、告白しよう。昔、私も一度だけ、ヒロポンに手を出したことがある。六十年以上も昔だが、時効だろうか？」

「〔石原組〕について、何をご存じですか？」

白井という麻薬取締官は、単刀直入に言った。

「訊く相手を間違えている。今の〔石原組〕——アイなんとかという名前だったと思うが——のシノギはまったく知らんよ。昔は、クスリは御法度だったはずだがね。今の若い三代目に当たってみるんだな。あるいは……」

いずみかじろう
「泉嘉次郎氏ですか」

私は持ち上げかけたグラスを、カウンタに置いた。

「すでにご存じか」

「ええ。元県議で、その長男は現職の参議院議員。長女は地元ゼネコン〈堀田建設〉の社長夫人。〈堀田建設〉の取締役には、〈石原組〉若頭が名を連ねている……ガードが堅いもので、なかなか」

「私はガードが堅くなかった、と?」

「気に障ったのなら、お詫びします。やはり〈石原組〉については、何もご存じないんですね。では、傘下の三次組織〈大隅組〉についても?」

「ちよつと待つてや!」

リサが割り込んだ。

「お爺ちゃんつて、何者なん? なんでヤクザ屋さんのことなんか知ってはるの?」私の代わりに答えたのは、猪熊だった。あろうことか、にやにやと訳知り顔に笑みを浮かべている。

「大尉殿と私はね、こう見えても若い頃は斬った張ったの修羅場をくぐった人間なんだよ。今は、ただの爺さんだけどね」

「マジい? 信じられへん」

リサが甲高い声を上げた。店内の男の客たちが、一齐に私たちに顔を向ける。私は低い声で言った。

「二次、三次など、そんな若造どものことなど、知るはずがなからう」

白井は、子どもつぽく笑った。

「そうですね。やはり、空振りですか……」

稲熊がコーラの入ったグラスをカウンタに置き、身を乗り出した。

「なあ白井さんよ、井之坂のやつ、やつぱり〈石原組〉の下で危ない橋を渡っていたのかい?」

白井はコーラを美味そうに飲むと、ため息混じりに答えた。

「危ない橋は渡っています。しかし〈石原組〉の下ではなく……上で」

「どういう意味だい?」

「お二方にはお話してもいいでしょう」

「あたしも入れて三人やで」

リサが口を挟んだ。

「確かに。どうか、口外なさらぬよう、お願いします」

井之坂晋吾は、独自に2C-Bという合成麻薬を密輸し、インターネットで販売していた。〈石原組〉——今では〈アイ・インヴェストメント〉と名乗っている——では、今でもクスリは御法度である。しかし、傘下の〈大隅組〉おおすみが、井之坂よりも前に同じ商売をしていた。上の組は、事実上の黙認をしていたらしい。〈大隅組〉は〈石原組〉傘下の三次組織で、数年前までは弱小の組だったが、最近になって急に勢力を伸ばしているという。おそらく、合成麻薬のインターネットによる密売が大きな資金源になっている。

〈大隅組〉にとつては、井之坂たちは、自分たちの「シマを荒らす素人」ということになる。

「ほな、その〈大隅組〉いうところが、井之坂を狙つとるゆうのん？」

リサが、押し殺した声で訊いた。

白井はうなずいた。

「お願いがあります。井之坂の妻、美奈の居所を教えてください、ありがたいのですが」

「そんなん知らんわ。それに、ミクは何も関係ないやん」

すかさずリサが言う。が、白井は動じなかった。

「ほう、『ミク』という源氏名で働いているんですか。あなたがたが匿っていることは知っているんです。場合によつては——私としても不本意ですが——警察の力を借りなければいけませんね」

「それは脅しかね」

「いいえ、忠告です。実は、〈大隅組〉が、井之坂たちの密売グループに追い込みをかけています。所詮、井之坂たちは素人、ヤクザと渡り合つて勝ち目はありません。その前に井之坂は、美奈さんと接触を図る可能性がある、と私は踏んでいます」

井之坂を恐れていた美奈の姿が思い出された。井之坂は美奈の居所を知らず、連絡方法もまた知らないはずだ。かりに何らかの形で連絡できたとして、美奈は会うだろうか？

そのとき、蠅か虻の羽のような振動を感じた。耳は遠くなつたが、そのいつぽうで、若い頃には意識しなかつた、べつの感覚が鋭くなつている。

白井はジャケットのベルトに付けた革製のケースから、携帯電話を取り出した。ちらりと左脇の下にシオルダー・ホルスターが見えた。銃を携帯している。

「わかつた」

白井は短く答えると、携帯電話をしまつて、私たちを振り返つた。

「失礼します。仕事ができましたので」

立ち上がりかけた白井の腕を掴んだのは、リサだつた。

「どないしたん？ 何かあつたんやろ？ ミクに関係あることなん？」

「申し上げられない。おいくらですか、マスター」

「私からおごるよ」

「それはいけません。私は国家公務員です。便宜供与と誤解されては困りますのであくまでも白井は真顔だつた。そして、コーラ代五百円を支払うと、そそくさとドアに向かつて歩き出した。

「ちよつと待つてや。うちらも行くで」

リサは、有無を言わず私の腕を取り、白井の後を追つた。

「大尉殿！」

「勘定はつけといてくれ」

私が背中越しに言うと、リサがドアを押し開けた。

店外に出ると、もう午後九時を過ぎているのに、昼間かと思うほどの勢いで、蟬が必死に鳴いていた。〈ブルー・カーバンクル〉は、表通りから二本奥に入った一方通行の道に面している。周囲は住宅地なので、人通りはほとんどなかつた。が、白井の姿は見当たらなかつた。

リサがいつの間にか携帯電話をかけていた。

「あかん……誰も出えへん」

「美奈さんはマンションにいないのかね？」

リサは、私の問いには答えず、また携帯電話のボタンを押した。

「あ、ミク、あんた何してんねん？ 『シエルター』から出たらあかん言うたやん。店長？ お店におんの？ 子どもらは？ あんたな、寝とるからいうて、子どもだけにしたらあかんやろ！ ほな、ゼツタイに一人で帰ったらあかんで！ 齋木さんカシンスケ君か、誰かに送ってもらうんや、ええな？」

リサは電話を切ると、つぶやいた。

「店長も勝手や……なんでこないな時間から研修やねん……？」

リサの言う「研修」とやらの内容がどんなものか、だいたいの想像がついた。いよ村木美奈も、本物の風俗嬢として、働き始めるのだろう。心地よいものではなかった。

『「シエルター」……あのマンション、子ども一人つきりやねん。早よ行かな……」

「どうしてそんなに焦っているんだ？」

「あの白井とかいうイケメン君、マジやった。ゼツタイに、なんかある」

「それは女の勘というやつかね？」

「お爺ちゃん、それ、差別的発言やで」

そのとき、ふと私の脳裏によぎる表情があった。

昏い光をたたえた瞳。

「リサさん、もう一度、お店に電話をしてくれないか？ 美奈さんの携帯電話ではなく、お店に」

「なんで？」

そう言いながらも、リサは携帯電話を操作した。

「あ、あたし、リサやけど。ミク、出してもらえる？ はあつ、なんで？ 店長は？ 帰った？ ウソや……」

リサは携帯電話を持ったまま、茫然と立ち尽くした。

「お店にはいなかったんだね」

「なんで？ いったいどういいうこと？」

「とにかく、まずはマンションへ行こう」

村木美奈の双眸が忘れられなかった。

——あいつ……いなくなってくれればいいのに……

私たちは大通りに出て、運良くすぐにタクシーを拾うことができた。「シエルター」と呼ばれるマンションへ向かった。

思ったとおりだった。

子どもたちの姿はなかった。もちろん、村木美奈の姿も。

リサは、がらんとした部屋の真ん中に座り込んだ。

「まさか……あの男に拉致らちられたん……？ あたしのせいや……」

私はそつとりサの脇に片膝を付いた。

「君のせいじゃない。井之坂のせいでもない」

「じゃあ、何なん？」

「見なさい。部屋のなかには、何も無い。紙オムツも、衣類も」

室内は、ちょうど〈コーポあずさ〉を思い起こさせた。

私は携帯電話を取り出した。登録してある数少ない番号から、県警「組織犯罪対策

局」つまり「マル暴」直通の番号を探した。

ちょうどそのときだった。私の手の上で、携帯電話が甲高い電子音を上げながら振動した。表示を見ると、稲熊からだった。

電話を耳に当てるやいなや、稲熊の声が飛び込んできた。

「越おさか阪部の兄ちゃんが来やがったんですよ！」

「今、やつに電話しようと思っていたところだ」

越阪部とは、県警マル暴の刑事だ。私や稲熊より二十歳以上も若いので稲熊は「兄ちゃん」と呼ぶが、もうすぐヒラ刑事のまま定年退職するはずだ。

「〈大隅組〉が動き出したって……まさか、美奈が襲われたんじゃ……」

「いや、美奈さんは大丈夫だ……おそらく」

「おそらく？ おそらくつてどういふことですか！」

「彼女は、自ら姿を消したんだ」

電話の向こうで稲熊が絶句した。リサが涙で潤んだ眼を見開いている。

村木美奈は、消えた。

四日後、井之坂晋吾と若者四人の屍体が港から引き揚げられた。

「信じられへん！」

〈ヒューガルテン・禁断の果実〉のグラスを一気に空けて、リサが言った。

「それは私もご同様だよ」

稲熊が渋面を作り、五本目の瓶の栓を抜き、リサの前に置いた。そして、私にらむような視線を向けた。

私は黙ったまま、ジョニ黒のロックをなめた。

まだ午前十一時。酒精を飲むには早い時刻だ。

リサの隣に座った白井敏弥は、コーラを一気にグラス半分ほど飲み、静かに言った。「お陰で、クスリのルートを二つ潰すことができました。みなさんのご協力には、心から感謝しています」

稲熊はカウンターに身を乗り出した。

「感謝だと？ 死人が出てるんだ。それに、美奈の行方もわからないんだぞ！」

〈大隅組〉の組員二人が、麻薬取締法違反で逮捕された。そして彼らの供述から、井之坂晋吾たち合成麻薬密売グループ殺害の自白が引き出され、供述通りに港から鎖で縛られダンベルをくくりつけられた五人の屍体が発見された。

〈大隅組〉は〈石原組〉から破門され、解散したという——県警マル暴の越阪部警部補から聞いた話だ。

「あとは警察の仕事です」

白井は、我々にだけオフレコとして漏らした。

あの日の夕方、井之坂を張っていた〈大隅組〉組員のレクサスのウィンドウとワイパーのあいだに、一枚の紙片が挟まっていた。そこには、

——21:00

という文字だけが書かれていたという。

〈大隅組〉は、マンシヨンの監視を強めた。すると、午後九時前に、井之坂は一人

で自宅兼事務所のマンションを車で出た。張っていた〈大隅組〉組員は、二人を尾行した。そして井之坂はJRの駅前で若い女と合流した。二人の着いた先は、彼らも知らなかったまったく別のマンションだった。そこは、井之坂たちが独自のルートで密輸した合成麻薬2C-Bの保管場所だった。血の気の多い組員たちが乗り込んだとき、すでに女の姿はなかったという。

——あいつ……いなくなってくればいいのに……

村木美奈がつぶやいたとおりになった。

「ごちそうさま」

白井は五百円玉をカウンターの上に置き、足早に〈ブルー・カーバンクル〉から去って行った。

しばしの静寂のあと、リサが独り言のように口を開いた。

「あの子、こんなんやらかして、幸せにしとるやろか……」

と、ドアに取り付けたカウベルが、からんからん、と乾いた音を立てた。

店内に入ってきたのは、齋木だった。私と稲熊に一礼すると、リサに言った。

「さつそく仕事だよ。いつもの社長さんだ」

「ホンマ？ なんでもう勃たへんのにあたし呼ぶんやろな？ 二時間、お爺ちゃんの話聴くだけで、ギヤラもチップももらえるねん。めっちゃ楽なお客さん」

そして、慌てた様子でリサはへヒューガルテン〈二本分の料金をカウンターに置いた。た。

「ほな、また来るで」

「ありがとうございます」

稲熊が、馬鹿丁寧に挨拶する。

齋木はお辞儀をして、ドアに向かった。が、そこで立ち止まり、振り返ると私の名を呼んだ。

「あなたは……何をされている方なんですか？」

「死に損ないの、ただの老いぼれだよ」

私は答えた。

「あなたとは……またお会いするような気がします」

「今度、あたし指名してや。サービスするで！」

リサが言う。

「それは……いざさか難しいな」

斎木はドアを開けた。カウベルが、からんからん、と鳴った。斎木は、一瞬動きを止めた。

「もう、夏も終わりですね」

「そう。やっと、夏が終わる」

蝉の叫び声は聞こえなかった。

「消えた娘」完